

## 第27回日本臨床微生物学会総会・学術集会

板羽 秀之\*

第27回日本臨床微生物学会総会・学術集会は平成28年1月29日(金曜日)午後から31日(日曜日)の3日間、「チーム医療・連携、そしてグローバル化へ～感染症診断・治療から感染制御まで～」をテーマとし、仙台国際センターで開催されました。会場は、雪に見舞われましたが、新展示場が完成し、地下鉄も開業して仙台駅から4分と交通の便も大変良くなっていました(写真1)。

長沢光章 総会長(東北大学病院 診療技術部 臨床検査技師長)、國島広之 副総会長(聖マリアナ医科大学 内科学総合診療内科)のもと、特別講演、招聘講演、教育講演4題、シンポジウム11題、Motivational Session 2題、緊急セミナーとして「MERSの検証と対策～韓国からの報告と日本

の対応～」、日韓ジョイントシンポジウム、日韓台フォーラム、ベーシックレクチャー10題で構成され、一般演題は口演発表147題、ポスター発表221題の報告がありました。その他にも各地区対抗のワークショップ、論文の書き方セミナー、医師・臨床検査技師・看護師のための感染症セミナー、関連学会・研究会からの報告、東日本大震災を経験しての「災害時における感染対策」などの盛り沢山の企画内容で、どのセッションに参加すればいいのかわ迷いながらの3日間でした。

特別講演は、賀来満夫先生(東北大学大学院医学系研究科 内科病態学講座 感染制御・検査診断学 教授)がエボラ出血熱、MERSなどのアウトブレイクやCREなどの薬剤耐性菌の蔓延など、新



写真1 雪の仙台国際センター

\* 広島国際大学保健医療学部医療技術学科臨床検査学専攻 h-itaha@hs.hirokoku-u.ac.jp

興・再興感染症として新たな問題が出現してきており、感染症クライシスであることを認識し、対応の必要があるとの報告でした。そのためには地域での医療機関や行政などの密接な連携と協力体制が必須であると講演されました。

教育講演は、1：新型インフルエンザ対策の見直しと必要性について、2：生物学的製剤投与で結核・非結核性抗酸菌症などが増加しており、その発症機序と診断・治療、予防について微生物検査との関連性について、3：臨床微生物検査における国際標準化機構 ISO の活動で微生物検査は感染症診断や治療に左右することから、精度保証、標準化は重要であり、ISO/TC212 の国際標準化活動の意義と展望について、4：次世代シークエンサーを用いての病原体を検出する方法について講演をされました。いずれも微生物検査がグローバル化に向けて動き出していることを痛感しました。

シンポジウムは 11 題のテーマが設けられており、いずれも学会テーマに副った内容でのディスカッションでした。今後の臨床微生物検査の役割や臨床との連携を医師、検査技師それぞれの立場から各施設での臨床における適正な抗菌薬治療の活動内容を報告されました。微生物検査の標準化に向けては、ISO15189 による認証を取得する施設が増加しており、臨床に有用な検査情報を提供するには、どのような方針のもとに進めていくべきか ISO15189 認定施設から微生物検査の標準化に対応するために、検査室の機材、標準作業手順書などの整備、要員の力量の向上に努める必要があると提言されました。

技師の教育についても「技師教育、このままでいいか」のテーマで議論され、1)微生物学の臨床実習における安全教育の現状、2)教育機関における臨床微生物学の卒前教育の問題点と臨床施設との連携、3)市中病院の人材育成、4)感染症専門医の立場からの見解、5)管理者として育成プログラムをどう進めるかを各テーマで報告されました。臨床検査学教育協議会と関係もある臨床実習については、全国アンケート調査(289 施設が回答)が行われ解析された結果、多くの問題点が判明しま

した。臨地実習での微生物検査の実習は最短 1 日、最長 8 週間と養成校間で大きく格差が生じています。要因としてカリキュラムの問題や受け入れ施設での諸事情により短縮せざるを得ないと推測されました。実習用菌種も赤痢菌や結核菌などの三種・四種病原体を扱うことを避ける施設が多くみられています。このことは学内実習でも同様に協議会の微生物部会でも検討課題となっており、卒前教育のあり方を含めて関係団体との協議が必要だと考えています。

その他のシンポジウムは、診療報酬改定により感染防止対策加算が導入され、各施設でのサーベイランスと地域連携についての報告や、エボラウイルス感染症や新型インフルエンザのアウトブレイクが世界的規模で発生し、わが国での診断法の開発や医療機関での対応策についての報告などがありました。

Motivational Session では医師と微生物検査技師が交わることで、診断に結びついた症例を取り上げ、コミュニケーションの重要性を紹介されました。もう 1 題は CRE や MDRA など注目される薬剤耐性菌について耐性機序や検出法など、日常検査での対応策について討議されました。

震災時における感染症対策については、東日本大震災でも、インフルエンザや感冒性胃腸炎、レジオネラ肺炎や破傷風などの重症感染症、市中肺炎の増加がみられ、初期対応が重要で、発生後の迅速評価のためには、アセスメントチームを速やかに現地に派遣することが必要であると訴えられていました。

ワークショップでは、各地区から日常検査で遭遇する機会の少ないまれに検出される菌について発表され、日常業務で分離同定が困難な菌や真菌など数多くの症例を提示され、縮刷版として各地ごとに日常業務に役立つ冊子にまとめられていました。参加者からどの地区が一番良かったかの投票がありましたが、どの地区が優勝したかはわかりません。ちなみに中国地区ではありませんでした。

今回は、今まで開催されてきた日本臨床微生物学会総会 学術集会で臨床検査技師が初めての総

**チーム医療・連携、そしてグローバル化へ**  
 —感染症診断・治療から感染制御まで—  
**Moving toward Team Medical Care / Collaboration and Globalization**  
 From Diagnosis and Treatment of Infectious Diseases to Infection Control

**2016年11月29日(金)13:00~31日(日)13:00**  
 January 29(Fri) to 31(Sun) 2016

**仙台国際センター・新展示施設**  
 Sendai International Center, Miyagi, Japan

**総会長**  
 President  
**長沢 光章**  
 Mitsuaki Nagasawa  
 東北大学病院 診療技術部  
 Clinical Technology Department,  
 Tohoku University Hospital

**情報交換会 (懇親会)**  
**オプションツアー**  
 オプションツアー 受付中

**副総会長**  
 Vice President  
**國島 広之**  
 Hiroyuki Kunishima  
 聖マリアンナ医科大学内科学総合診療内科  
 Division of General Internal Medicine,  
 St. Marianna University School of Medicine

笑顔咲くたび  
 伊達を旅  
 仙台・喜城  
 写真提供: 山台市 光文館

写真2 第27回日本臨床微生物学会総会・学術集会 ポスター

会長でありました。総会長講演では日本臨床微生物学会発足時の苦勞や、我々の目的であった認定臨床微生物検査技師の立上げの苦勞話など講演され、人と人のつながりが最も大事で、多くの人

に助けられて来られたことは幸せであったとの話は印象に残りました。発足当時のメンバーが多く参加され、盛会裏に終えた学会でありました(写真2)。